西洋史学コース

【コースの特色】 西洋史学コースは、ヨーロッパの地域に関する古代から現代までの歴史を対象として、基本的には西洋史学の研究者、専門家を養成するための教育機関であるが、同時に西洋史学の専門的知識を生かし、中学校・高校の教員、マスコミ、出版、公務員、図書館員などの様々な業種で活躍する人材を育てるためのコースでもある。現代世界は戦争、疫病、環境問題など、深刻な多くの課題を抱えているが、現代世界の成り立ちをヨーロッパ文明の長い歴史のスパンから考察し、現代に即した新たな歴史像を生み出すことが西洋史学の大きな役割である。とりわけ、ヨーロッパの歴史を学ぶことは、ヨーロッパが古代以来、形成し、現代の世界でもその枠組みが共有されている制度や文明の基礎を学ぶことにつながり、今日の世界がどのように過程を経て成り立ったのかを知る上で重要である。このような問題意識を共有しながら、本コースでは、古代から現代までの領域を網羅するかたちで指導にあたっている。

【語学力の重要性】 西洋史学は何よりも外国語の史料や文献の読破が必須の学問なので、自身が専門とする時代・地域で使用される欧米の諸言語の十分な知識が必要とされるのはいうまでもない。深く文字資料を読みこなす語学力を徹底的に習得することが重要である。

【入試】 入試に関しては、一般外国語のほかに、自身が取り組もうとする専門領域の知識だけでなくヨーロッパ史に関する基本的な素養が要求される。専門家になるためには自身の関心領域のみならず、広くヨーロッパ史の流れの理解することも大切である。

【主な進路】 大学教員、高校教員、公務員、出版社、マスコミなど

【専任教員からのメッセージ】

1. 甚野尚志（中世ヨーロッパ史） 専門はヨーロッパ中世史、とくに教会史と文化史。ヨーロッパ中世に生きた人々の心のありようを解明することを目標としています。わたしたち日本人は、政治、経済、社会のあらゆる領域で西洋を手本にして来ました。ですから西洋史を学ぶことは、日本人が模倣し同化してきた西洋文明の根幹を知ることといえます。自分たちの世界を知るためにも、ヨーロッパの古い歴史を勉強することはとても意味があるといえます。

2. 松園 伸（イギリス近現代史） 専攻はイギリス近現代史。早稲田はイギリスに関する資料の宝庫。ともに学べるのを楽しみにしています。「ロンドンに厭きた人は人生に厭きた人である」という諺がありますが、これをイギリスと置き換えてもよいかも知れませ

ん。どんな興味・関心を持つ人にも英国はなにかを与えてくれます。とりわけ長い歴史を誇る英国は多くの史家によって描かれてきました。一緒にイギリス史を学びましょう。

3. 小原 淳(ドイツ近現代史) 19～20世紀のドイツの政治史・社会史を研究しています。中世以来、小国の寄り合い所帯だったドイツは、統一を実現して世界の強国へと変貌し、そしてこんにちへと至る過程で、周辺地域のみならず世界史全般に大きな爪痕を残しました。ドイツの歩みをたどりながら、世界と日本の歴史を考えてみたいと思います。

4. 井上 文則(古代ローマ史) 私の研究テーマは、ローマ帝国史です。これまでは特に3世紀の軍人皇帝時代の政治や軍事のことなどを研究してきました。また同じ時代に大流行したミトラス教にも関心をもっています。ローマ史の研究は、学ぶべき語学が多いなど大変な面もありますが、やりがいがあります。関心のある方は、ぜひ挑戦してみてください。

5. 中澤 達哉(東欧近世・近代史) かつて1990年代の東欧では、ユーゴスラヴィア内戦にみるように民族紛争が多発し、流血の惨事が続いていました。なぜ、東欧の人々は自らの民族や国民のために命を賭してまで戦えるのでしょうか。民族や国民は、いつから、その原理の名のもとに人々を戦争に動員できるほどの政治集団として認識されるようになったのでしょうか。このような問題意識のもとに、スロヴァキア・ハンガリー・ハプスブルク帝国史を始めとする東欧近世・近代史を研究しています。

6. 貝原 伴寛(フランス近世史) 啓蒙と革命の時代たる18世紀を中心に、近世フランスを主に文化面から研究しています。テーマとしては、愛玩動物の研究からスタートして、恋愛結婚の理念化など、近代家族をめぐる諸問題に取り組んでいます。文化史研究の方法論一般にも興味があり、とりわけフランスのアナール派が発展させた「心性史」や「感性史」、さらには英語圏やドイツ語圏でも探究の進む「感情史」に関心を寄せています。

* 進学についてのご質問、ご相談は教員もしくは助手まで直接お尋ねください。

* 西洋史コース室は早稲田大学戸山キャンパス 33号館 6階 603にあります